

日曜日一時半ニテ富子秀子同車ニテ出発ス、式時半井上伯、兼テ通知ノ通り行、同席ハ青木、野村、陸奥宗光、沖、波沢栄一、益田、同志社新島襄ナリ、同志社学校ヲ大ニテ維持スル為メ、廿萬円資本ヲ以、其利子ニテ維持スル事、右資本ノ内拾萬円ハ、米國ニテ募ル見込ニテ、同國へ向出發云々、五萬円ハ西京、滋賀、大阪地方ニテ出来セ



同志社人物誌 (40)

# 原 六 郎

仲 村 研

リ、又残り五萬ハ東京ニテ応募者ヲ募ル云々、同伯ヨリ演舌ノ趣意ハ、日本ハモロールヲ進メ Conscious 等ヲ進メル云々、人ヲヘル云々、依テ新島ノ新学校を成賛云々、

新島ハ従前本人ノ教育ニ志シタル履歴等ヲ演舌セリ、本日新島俄ニ病氣発シ中途ニシテ帰ル、

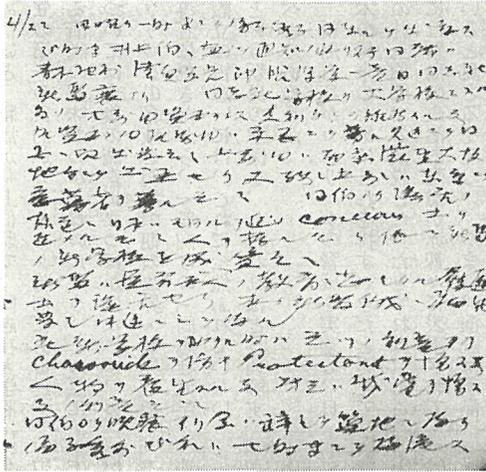
此新学校ヲ助クル時ハ、三ツノ利益アリ、Chassorick ヲ防キ Protestant ヲ増ス事、人物ヲ養生スル事、第三ハ我党ヲ増ス事ノ利益云々、

同伯ヨリ晚餐アリ、余ハ辞シテ築地ニ帰り、富子秀外式名ハ七時半ニテ帰港ス、(本文は横書きであるが、縦書きにしておいた) 仲村

この文は原六郎が日記の明治二十一年四月二十二日の項に記したものである。日記は皮表紙の手帳で、私はこの一節を十年前に東京品川御殿山の原邸で撮影した。原六郎の日記はすべて手帳で、雑記帳をあわせると、大型の皮トランクに、一杯あり、日記は明治八年頃から大正末年におよんでいたと記憶する。原の記帳の方法は実に細かく、とくに時間の記入には神経を使っている。

この一節を写真におさめたのは、昭和十二年に刊行された『原六郎翁伝』中巻に「同志社大学設立資金の寄附」という項があり、その中に日記が引用されていたからである(この一節は中巻四七八ページに引用されているが、編者が都合のよいように書き換えているので、ここでは原文を忠実に紹介しおいた)。

さてこの日記の記事を検討しよう。四月二



原六郎日記

1888 (明治21年) 4月22日の項

立する目的の第一に、カソリックの伸長を予防し、プロテスタントを増勢する点をあげていることである。周知のように、明治十六年四月に新島が起草した『同志社設立の始末』や同二十一年十一月の『同志社大学設立の旨意』には、「カソリックを防ぎプロテスタントを増す事」に該当する文言は片言隻語だにない。

これはどういうことなのか。従来の新島研究や同志社研究で、この点にふれたものがあることを知らない。新島が同志社大学設立に

十二日の会合は井上馨伯爵邸でおこなわれた。出席者は青木周蔵、野村靖、陸奥宗光、沖守固、渋沢栄一、益田孝、原六郎で、同志社関係では新島のほか湯浅治郎、徳富猪一郎、加藤勇次郎であった。青木、野村、陸奥、井上らは明治二十年代の政界の主要メンバーであり、渋沢、益田、原は財界を代表するメンバーであった。沖は因幡藩出身で原とは年来の知己であり、当時は神奈川県知事の職に

あった。この日記できわめて重要な問題は、井上邸での新島の演説の内容である。それを原六郎は三点にまとめている。すなわち、

- 一、カソリック勢力の伸長を防ぎプロテスタントの勢力を増強すること。
- 二、人物を養成すること。
- 三、わが党人を増加させること。

である。三の「我党人」というのは、新島の用語では同志社人と同義である。重要なのは一である。新島が同志社大学を設

かんして、目的の第一にカソリックを予防するためだと演説したことには、二つの可能性がある。まず、新島は現実にかソリックの脅威があまりないのにかかわらず、その脅威をもち出し、危機感をおおることによって、明治政府の中軸を占める人たちから、プロテスタントの拡大同志社大学設立への援助をえようとした。第二の可能性としては、現実にかソリックの脅威があり、憂慮した新島自身がこれを防御するためにも同志社大学設立の必要がありとした。

この二つの可能性を検討するためには、第一に新島が滞在した十九世紀半のニュー・イングランドにおけるプロテスタントとカソリックとの対立、その対立の中で新島は、カソリックにたいしてどのように考えていたか、を調査することが重要である。第二に、明治十年代の日本におけるカソリックの教線とプロテスタントの教線のあり方、とくに教線相互の葛藤状況を見なければならぬ。第三には、明治政府が明治十年代にプロテスタントとカソリックをどのように扱っていたか、すなわち、明治政府のキリスト教政策はどうであったかである。以上の三点を正確に見きわ

めないとい、新島が井上伯邸で、同志社大学設立の第一の目的がカソリック防衛にあるとする演説の意味もわからないだろう。この点については今後の調査にまつほかはないが、カソリックの脅威を明治中期の政界・財界の指導者に説きながら、一般向けの「同志社大学設立の旨意」には、これに全然ふれていないという新島の意図を、われわれはどう理解すべきであろうか。

新島自身がカソリックの脅威を実感し、日本の将来のためにこれを排すべきだと考えての井上伯邸での演説となったとすれば、そこには新島の政治的配慮が赤裸々に表現されていると見ざるをえない。つまり、演説は新島のホンネであり、『同志社大学設立の旨意』はホンネを隠したタタマエということができよう。したがって、このホンネとタタマエとの狭間には、新島に「信教の自由」にまつわる後、ろめたさと、カソリック側からの反発にたいする恐れがあったと考えざるをえないのである。

この募金演説のあと、新島は同年七月十九日にも大隈伯邸で演説し、これが奏功して、明治二十一年十一月までに、大隈重信千円、

井上馨千円、青木周蔵五百円、渋沢栄一六千円、岩崎久弥二千五百円、平沼八太郎二千五百円、大倉喜八郎二千円、益田孝二千円、岩崎弥之助五千円、田中平八二千円、原六郎六千円の寄付金をえた。六千円という最高額は渋沢と原の二人である。

では原六郎はどうして新島の同志社に巨額を拠金したのであるうか。つきにこの点について記しておこう。明治二十三年一月二十二日の原六郎日記には、昨夜徳富猪一郎からの電報で、新島が大磯で危篤状態にあるのとこのことを知り、午後一時に大磯で新島と徳富に面談し、徳富からすでに新島の遺言を書き留めたことの話があつて、午後五時十七分横浜へ帰つたことが記されている。『原六郎翁伝』には、徳富が書き留めた新島の遺言が掲載されている。それは前日の二十一日の日付で「謹て告別申上候、是迄同志社大学の為めには不一方御高配被成下候儀奉感佩候、小生没後も行末長く御心に懸け被成下度、乍此上懇請申上候」と記されている。大学設立の募金に最高額を出資し、臨終直前の新島を大磯に見舞っている原六郎について、現在の同志社人はあまりにも無関心である。ちなみに昭和

三十五年に刊行された『新島先生書簡集続』所収の「新島襄先生年譜」にも、原六郎の見舞いの一件は記入されていない。

さて、これほどまで親密な関係にある原と新島との初対面は、いつ、どこであつたのであろうか。このことについては『原六郎翁伝』はふれていないが、幸い新島は明治四年九月六日、安中の父民治宛の書簡の中に原との出会いを記している。当時新島は北米アンドバー滞在中で、その書簡で弟雙六死去の悲報に接し、父母にたいする慰めの言葉をつづっている。その一節を引用しよう。

扱て、雙六病死の儀は兼て川田剛先生より、名古屋藩の士人丹羽氏に托して遣はせし書状にて承知仕候。如何なる病氣にて死に果しかは一切相分らざるに付、兼て川田塾にこれあり候因州の大参事池田徳潤なる者、近々アンドワ近傍の都府ポストンへ参り候趣聞き及び候間、一昨日当所へ参上仕り、池田氏に対面し、種々雙六の事御尋ね候處、一切病氣の事相分り兼候。然し彼所に池田の同藩原長政、薩州佐土原の大公子島津忠亮、清水様「従五位」御嫡子十五

歳に成られ候重國へ、等の御方々へ対顔し、殊修業御出成され候

の外御丁寧の御取扱にあつかり申候。一昨日より今朝迄は池田氏の宿屋に逗留いたし、今朝小子の親友ハーディー君相尋ね候處、計らずも日本よりの書状彼處にて請取拜見仕候て、委細承知仕候。

この書簡によると、弟雙六と因幡藩大参事池田徳潤とが同じ川田塾（川田剛は備中松山藩士、維新後半迄で塾を開く。漢文学の大家でのち貴族院議員。川田順の父）の塾生であることを知っていた新島は、偶然ポストンに来ていた池田に弟の病氣のことを尋ねるために出向いたのである。池田徳潤は因幡鳥取藩池田慶徳の分家筋にあたり、播磨国福本藩一万石余の藩主である。明治三年に福本藩は因幡藩に編入されたのち、三十万石以上の藩が藩費留学生二人を出すことを維新政府から指令された因幡藩は、この池田徳潤と原六郎との二人をアメリカへ派遣したのであり、明治四年九月には二人はポストンに滞在していたのである。新島は弟雙六と同塾生であるということで池田と会い、そのさい、偶然に池田と同宿の原六郎と会うことになった。新島の書簡に「池田

の同藩原長政」とあるのがまさしく原六郎で、新島は九月四日から九月六日朝までの三日間をポストンの池田の宿屋で原六郎と起居を共にしている。明治四年九月四日、この日が新島と原との初対面であり、新島の没する前日の明治二十三年一月二十二日にいたる二十年が両者の交際の期間である。

原六郎、本名進藤長政、幼名俊三郎は、但馬国朝来郡佐中村（現兵庫県朝来郡朝来町佐中）で天保十三年に生まれた。進藤家は地主で庄屋であった（佐中の進藤家（元三井船舶会長進藤孝二氏管理）に元和年間の検地帳はじめ壬申戸籍など多数の地方文書が保管されていることを私は確認している）。安政二年に養父郡宿南村の青谿書院に入門し北垣晋太郎（のちの京都府知事）と知りあい、文久二年に北垣らと農民兵を組織することを計画し、翌三年に生野の義拳を準備し、兵器調達中に生野拳兵があつて敗れ、原は鳥取から長州へ逃亡した。原は武士ではなく、いわゆる郷士の身分にあつた。この事件以後、進藤俊三郎は進藤家の家系である藤原氏の「原」を逃亡中の変名として使用し、これが原の生涯の姓となるのである。鳥取逃亡中は、因幡藩の進歩派河田佐久馬と知りあい、

慶応元年、二十四歳で長州藩守備隊に参加し、幕府の長州再征にさいし、これと戦い、同三年、山口の明倫館で大村益次郎にフランス式兵学を教わっている。同四年一月、鳥羽伏見で戦端がひらかれ、討幕戦が展開されると、東山道参謀、因幡藩の河田佐久馬に従い、先に因幡・長州藩士が組織していた丹波の山国農兵隊の司令として、組頭藤野齋ら三十五名を引率し、江戸から宇都宮へ転戦し、上野彰義隊の乱や小田原城攻略戦から奥羽征討軍に参加し（山国隊司令としての原の活動については、拙著『山国隊』（学生社刊）を参照されたい）、五稜廓攻撃ののち、明治二年に因幡藩士分に取りたてられ、明治四年には因幡藩大隊長に任命せられ、大隊長として池田徳潤とともに欧米視察を命ぜられ、同年七月にアメリカに到着し、この年の九月四日にポストンで新島と邂逅したのである。視察はもちろん軍事上のものであった。

このままであれば、原の人生は大村益次郎の下での維新政府軍隊の育成に終わったであろうが、歴史の偶然は原を転向させた。明治四年八月二十九日（太陽曆）に維新政府が断行した廢藩置県策は海外留学生に大きな影響を



原六郎と富子夫人（1928年）—『原六郎翁伝』中巻より転載

およぼした。当時の留学生は三百七十三人で、政府派遣が二百五十六人、藩派遣が百七人であり、原は藩からの留学生であった。藩から県への切り換えののち、県は留学生の援助を打ち切った。そこで原は因幡藩大隊長と藩費留学生を辞し、自費で修学することになった。これを機にして原の修学の対象は軍事関係学ではなくなった。明治二年十一月に

師大村益次郎が暗殺され、新政府の軍隊の中での自らの将来に不安を抱いた原には、この機会は絶好であった。長州藩系列に属する因幡藩に籍をおき、明治二年五月、郷土から十分に昇格されたとはいえ、薩長藩閥政府のもとは、原のような出自では不安がつきまわったに相違ない。原の生家進藤家は地主であり、家内製糸工場をも経営していた。したがって、原には生来の実業家的才能があり、この才覚が生野の変にさいし、兵器調達に任じ生かされたであろう。原の留学中のアメリカは、南北戦争直後で紙幣が暴落していたが、原は所持金で紙幣を買い入れ銀行に預金し、その紙幣の昂騰を待ち、倍額近い金をえて、これを基金に修学した。以後、原の勉学は経済学、とりわけ金融論、銀行論で、イェール大学と、英国に渡ってはキングス・カレッジでこれを修め、明治十年五月に帰国したのち、まず因幡藩の有志と第百国立銀行設立に加わり、明治十六年に開業四年目の横浜正金銀行の頭取となった。時に四十二歳であり、これを足場に明治の実業界に進出するのである。

さて明治四年九月、原がボストンの宿で池田徳潤とともに新島に会ったのち、新島との関係はどうであろうか。明治二十年二月、原四十六歳のとき、奈良県吉野の山林地主で当時山林王と称された土倉庄三郎の長女富子と婚約する。仲介者は郷里の青谿書院での同門の北垣国道であり、北垣はその時京都府知事であった。原にとって北垣は多感な青春時代に生死を共にした友人であった。その北垣は京都府知事として新島と知己の間柄にあったことはいうまでもなく、新島はとくに大学設立について北垣と接触を保っていた。

土倉庄三郎には十人の子供があった。五人が女、五人が男である。のち長女が原六郎夫人、次女が外務大臣内田康哉夫人、三女系、四女小糸は双生児で京都の佐伯理一郎夫人、川本海蔵夫人、五女は青木鉄太郎夫人となっている。男の方は夭折して庄三郎の志は生かされていない。近時の自由民権運動の研究では、土倉庄三郎が運動のパトロン的存在であり、とくに藩閥から除外された旧土佐藩系の運動家を庇護していることを明らかにし、加えて板垣退助洋行費問題で、費用二万円を出したのは土倉庄三郎であることが明らかにされた（土倉祥子『評伝土倉庄三郎』、平井良明『板垣退助欧遊費の出資者に就いて』、『日本歴史』二三八

号。土倉は子供の教育には熱心で富子、政子らは大阪の梅花女学校に入れたがやがて同志社女学校に転校させた。政子はデントン女史の勧めで明治二十三年にフィラデルフィアのプリンマー・カレッジに留学している。同志社での教育は土倉の子女をクリスチャンにしたが、とりわけ佐伯理一郎夫人となった糸の信仰は熱狂的なものであった。土倉と新島との間の書簡を見ると、新島が同志社発展のために土倉をいかに頼りにしているか明らかである。この土倉―新島の関係が京都府知事北垣国道を介して原六郎に結びつけられたのである。

明治二十一年二月、四十七歳の原は、十九歳の土倉富子と祇園中村楼で挙式した。媒酌人北垣国道と旧因幡藩の同僚で神楽川県知事沖守固が奔走し、新島は司式をつとめていた。原は先に遠縁の橋本安佐と結婚し一女秀子をもうけているが、明治十八年に離別している。冒頭にあげた日記に「富子秀子同車ニテ出発ス」とあるこの二人は、新妻富子と先妻の子秀子である。この挙式より二か月あとで、新島が上京し、井上伯邸での演説がおこなわれるのである。原が新妻の恩師で、しか

も舅ときわめて親密な関係にあり、自らも十七年前異国の地で出会い、いま婚儀の司式を果たしてくれた新島の事業に深い関心をもって出席したのは当然であった。

原六郎は明治・大正の日本実業界の指導者として生き、昭和八年十一月十四日九十二歳で死去する。夫人富子は同志社以来のクリスチャンであるが、原は晩年東京大手町教会で内村鑑三の説教に聴き入り、大正十一年八十歳にして入信し、臨終には枕頭で金森通倫が最後の祈禱をおこなっている。

毎年十月二十二日に行われる平安神宮の時代祭の先頭をゆく農兵隊の祖型である丹波山国農兵隊の司令をつとめ、明治の実業界の指導者となった原六郎の名前を知る人は、いまの同志社にはすくないであろう。この懸念を払うために一文を草したのであるが、最後に一言付け加えると、現在の同志社大学会館の場所にあった旧文化学科研究室、通称「北寮」は、明治末年には「原学寮」といわれ、原の寄付によるものであった。私なども昭和二十八年から三十一年までその建物で講義をうけたものの一人である。(一九七七・七・二六)

(大文学人文科学研究所専任研究員)

## 表紙に寄せて

市原茂行

香真館(チャペル講堂)を描いてみました。香里の丘を登ると、樹間にみえかくれして力強く、美しい姿が目に入ってくる。桜並木をぬけけると威風堂々とした姿を目のあたりにみせる。

真理の追求の場にふさわしい姿で、幾万の友を送り出すにふさわしい威厳に満ちた姿で建つ。廻りの樹々も、若き香里を象徴するかのように若々しい姿で立つ。生徒たちが大きく成長することを願い見守り、やがて自からも大きく育つことだろう。

若く、美しく、力強く、堂々とした香真館、そんな姿を描いてみたかった。美しく、堂々とした香真館を描くのに幾多の構図が考えられたが、結局は丘を登りつめた所、斜め正面からの姿におちついてしまった。

(香里中・高教論・美術)